

〔連載〕武州みたけの信仰⑭ やまとたけるのみこと 日本武尊について(下)

國學院大學教授
神道學博士

三橋 健

連歌の起源

ヤマトタケルは常陸国や相模国を過ぎて甲斐国に至り、酒折宮に逗留された。その地は、現在の甲府市酒折町に所在する酒折神社にあたるといわれております。

タケルはこの宮でお食事を召しあがられ、その夜、そばにいた火焚きの老人に、
新治 筑波を過ぎて
幾夜か寝つる

と歌でもっておたずねになりました。この歌は「新治や筑波を過ぎて、幾夜寝ただろうか」という意味で、これに対し、火焚きの老人も、歌で次のように答えました。

かがなべて 夜には九夜
日には十日

これは「日数を重ねて、夜では九夜、昼では十日になります」との意味になります。

注意されるのは、互いに歌で問答をしていることで、これを世に、連歌の起源といっております。また、連歌のことを「筑波の道」ともいうのは、ここに「筑波を過ぎて」との問答が行なわれたことに由来しております。

伊吹山での困惑

その後、タケルは甲斐国から信濃国を越え、尾張国に行き、かねて約束していたミヤズ比売と結婚なさいました。

次いでタケルは腰につけていた草薙剣を比売のもとに置いて伊吹山の神を討つために出発なさいました。この山は海拔一三七七メートルあり、滋賀県と岐阜県の境に所在しています。古くから気象の荒れやすいこと、また、薬草が豊富なことでも有名です。

その山麓で、タケルは、「この山の神を、素手で討ち取ってやる」と意気込んで登って行きました。途中、牛のように大きな白い猪と出会いました。それをタケルは、

「この白い猪は、山の神の使者であろう。下山する際に殺してやる」といいます。しかし、白い猪

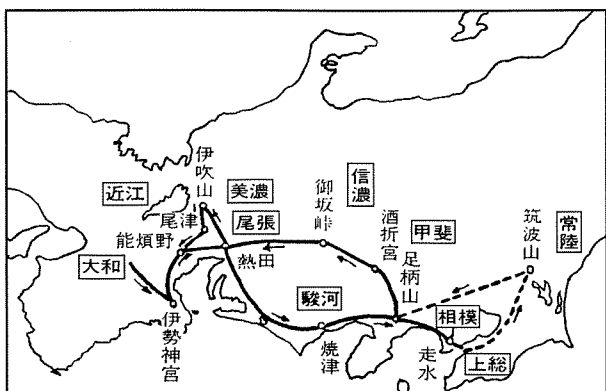
は、山の神の仕者でなく、山の神そのものだったのです。おりしも山には氷雨が降っていました。タケルは心身ともに疲労困憊して、すっかり困惑してしまいました。

望郷歌を詠み崩る

正気にかえったタケルは、すっかり疲れた身体を杖に託して伊勢国に入りました。尾津や三重を通りすぎ、さらにお進みになり、能褒野にお着きになりました。その時、倭の国のことが思い出され、次のような望郷の歌をお詠みになりました。

倭は 国のまほろば
たたなづく 青垣 山隠
れる 倭しうるはし

この歌の大意は「ふるさと



『古事記』による倭建命の東征路(……行程不明の仮線)
(荻原浅男著『古事記』小学館より)

た国だ、幾重にも垣根のように重なった山々が周囲を取り囲んでいる倭は、ほんとうに美しい国だ」となります。

また、タケルは、次のように歌いました。
命の またけむ人は
たたみこも 平群の山の
熊白禱が葉を 髻華に挿
せ その子

歌の大意は「若者たちよ、平群の山の大きな榎の木の葉

を、髪に挿して飾りなさい、若者たちよ」ということで、将来ある若者たちへ期待を込めて歌ったものと思います。

その時、タケルの病気は急に重くなり危篤状態になっていました。そこで、タケルは再び歌を詠まれました。

はしけやし 我が方よ
雲居立ちくも

この歌は「懐かしいわが家

から、雲がわき起こってくる」との意味です。さらにミヤズ比売のことが思いやられて、次のようにも歌われま

した。
嬢子の 床のべに
わが置きし 剣の
太刀 その太刀はや
この意味は「乙女の床のあたりに私が置いてきた太刀、その太刀よ」となります。乙女はミヤズ比売であり、太刀は草薙剣のことで

白鳥となり天翔る

タケルが崩れたことを知った倭の国の妃や御子たちは、急ぎ能褒野へ下向して、御陵を造り、悲しみのうちに挽歌(別れの歌)を詠まれた。

ある日のこと、タケルの御魂は大きな白鳥となって、天空高く飛び立ちました。遺族たちはそれを泣きながら追いかけて行き、それぞれに挽歌を詠みました。

この時の挽歌は、その後の天皇の大葬の際の挽歌の起源となったと『古事記』は記しています

さて、白鳥となったタケルの御魂は、空高く飛んで行き、河内の国の志織に留まりました。そこに御陵を造り、タケ

ルの御魂をお鎮めました。なお、その御陵は「白鳥の御陵」といわれております。

- ① 伊勢の能褒野の御陵
- ② 倭の琴弾原の御陵
- ③ 河内の旧市邑の御陵

これらの三御陵を、当時の人々は「白鳥陵」と呼びました。なお、群臣たちがタケルの御棺を開いてみたら、そこには明衣だけが空しく残っています。ご遺体は無かったとい